

花巻市 博物館

目次／P 1 テーマ展「花巻のやきもの—縄文から現代—」／P
2-3 先人コーナーリニューアル／P 4-5 テーマ展「花巻の
やきもの—縄文から現代—」／P 6 研究ノート／P 7 館長コラ
ム・インフォメーション／P 8 花博コレクション



facebook
公開中！

だより

2022.8
No. 67



縄文時代に誕生した日本のやきものは、1万年以上もの長い歴史をもち、現代の私たちの暮らしに欠かせないものとなっています。また、やきものは日常の生活で身近に接しているだけでなく、美術工芸品としても親しまれ、日常の生活を越えた心の中にまで大きな位置を占めているといっても過言ではありません。

花巻市博物館では、令和4年9月17日（土）から11月20日（日）の期間で、テーマ展「花巻のやきもの—縄文から現代—」を開催します。本展では、花巻ゆかりの縄文土器から現代の陶磁器までを紹介し、花巻のやきものの歴史と文化をたどります。地域のやきものの歴史と文化に触れながら、やきものに親しみ、愉しむひと時をお過ごしください。

常設展示室 花巻の先人コーナー

リニューアルしました！！

常設展示室内にある花巻の先人コーナーを7月日にリニューアルしました。今年度ご紹介する先人は、
谷村貞治（石鳥谷地域）、^{やむらていじ}照井真臣乳（花巻地域）、
^{ふなごしれいかい}船越霊戒（東和地域）です。

谷村貞治（1896-1968）

谷村貞治は、新堀村（現在の石鳥谷町新堀）出身の電気技師です。新興製作所を創立して日本語ワープロの前身と言われる漢字テレプリンタを開発し、日本の通信技術に大きな革命を起こした人物でもあります。

現在の花巻東高等学校の前身となる谷村学院を設立して人材育成に努めたほか、釜石線全線開通促進運動や花巻公民館の建設などの事業に対して惜みなく私財を提供し、郷土の発展にも尽力しました。



当館所蔵

照井真臣乳（1873-1948）



個人蔵

照井真臣乳は西十二丁目（現在の花巻市十二丁目）生まれの教育者で、近代キリスト思想家であった内村鑑三の弟子の1人でもあります。

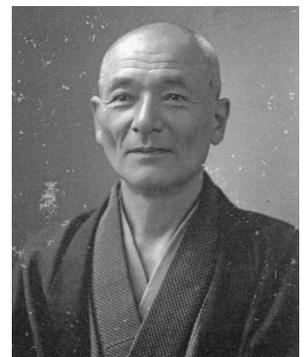
明治28年（1895）に岩手県尋常師範学校を卒業した真臣乳は、里川口尋常小学校（のちの花巻尋常高等小学校）の訓導

となりました。教え子の中には、詩人・童話作家と

して有名な宮沢賢治もいます。勤勉実直な人柄として生徒から慕われた真臣乳は、大正12年（1923）に南城尋常小学校の初代校長となり、7年後の昭和5年3月をもって教師の職を退きました。

船越霊戒（1875-1947）

霊戒は、安儀村（現在の東和町安儀）の凌雲寺の第21世住職だった人物です。幼少期より菊池黙道一門から南画を習っていた霊戒は、檀家に頼まれては絵を描いて渡し、声の通る読経や分かりやすい説教とともに評判だったといわれています。大正15年（1926）に全焼した凌雲寺本堂の再建を目指して、全国に布教と達磨絵の頒布に出かけた霊戒は、南は台湾、北は北海道まで足を運んで達磨絵の頒布会を開き、本堂再建のための木材購入の資金を貯めました。道半ばで亡くなりましたが、本堂再建は昭和50年に孫弟子西川隆道によって成し遂げられます。



凌雲寺所蔵



先人コーナーの様子

今回の3名の先人は7月6日（水）から1年間展示する予定です。ぜひ足をお運びください。

（学芸員 小田島智恵）

活動レポート

— 令和4年度博・学連携推進研修会 —

5月31日、花巻市博物館・学校連携研究委員会の事業の1つとして、花巻市博物館を会場に令和4年度博・学連携推進研修会が開催されました。

この研修会は、児童・生徒の学習効果の向上を図り、豊かな成長を促すために、花巻市博物館が持っている様々な教育機能を、学校教育活動において十分に活用してもらうことを目的として、市内の小中学校の先生方にお越しいただき、毎年開催しています。

研修会の冒頭では、当館館長の中村良幸より「博物館の実物資料を通して教科書だけでは勉強出来ないことが学べたり、子供たちに興味や関心を持たせることができる。博物館に来られなくても、出前授業やオンライン授業を活用していただきたい。」と挨拶がありました。

研修会ではまず、常設展示室と開催中のテーマ展「屏風と襖」の見学をしていただきました。



▲〈こどもガイド〉を手に、開催中のテーマ展「屏風と襖」を見学。

実際の博物館見学と同様に、見学前に学芸員によるスライドでの説明を受けていただき、展示室ではこどもガイドなどに記入しながら、展示を鑑賞していただきました。

博物館見学のイメージを掴んでいただくとともに、花巻市博物館がどのような展示をしているのか、博物館でどのような事を学ぶことができるのか、知っていただけたのではないのでしょうか。ぜひ、この見学をもとに、有意義な博物館見学を行っていただきたいと思います。



▲常設展示室の説明を受ける様子。事前の解説によって、見学のポイントを掴むことができる。

見学後は、出前授業「戦争と花巻」とオンライン授業「東北地方の災害」について紹介しました。この二つは、教科書だけでは学ぶことが出来ない内容ですので、ぜひ活用していただきたいです。



▲オンライン授業「東北地方の災害」について説明。

花巻市博物館では、今年度も博物館と学校が連携しながら、子どもたちの学習のためにより良い学びの場となるよう尽力して参りたいと思います。

(学芸調査員 松橋香澄)

令和4年度テーマ展

花巻のやきもの

期間：令和4年9月17日(土)～11月20日(日)

— 縄文から現代 —

「第1章 はじまりのやきもの — 縄文土器から弥生土器まで」

世界最古のやきもののひとつといわれる縄文土器。花巻でも特色ある様々な縄文土器が作られました。弥生時代には、西日本を中心に装飾の少ないシンプルな弥生土器が作られますが、東北地方北部では縄目文様など装飾豊かな縄文土器の特徴を色濃く残した土器作りが続きます。縄文土器と弥生土器の素朴な色彩や独特な造形と文様をお楽しみください。



久田野Ⅱ遺跡出土深鉢形土器

「第2章 古代 — 素焼きの土器から須恵器・施釉陶器へ」

古墳時代になると土器の焼成技術が向上し、弥生土器の系譜をもつ土師器が作られるようになりました。5世紀には朝鮮半島から新しい技術がもたらされ、須恵器の生産が始まりました。以降、日本のやきものは、常に中国や朝鮮半島のやきものの先進技術を学び、手本とすることで発展します。特に高火度焼成で作られる施釉陶器の誕生は、やきものをガラス状の膜で覆う釉薬により、素焼きの土器とは異なる彩



似内遺跡出土須恵器三耳壺

をもたらししました。

花巻では、7世紀の終わり頃から営まれた集落遺跡や古墳群から土師器や須恵器が出土するようになります。その後、平安時代になると、灰釉陶器が出土する遺跡もみられます。古代の花巻では、土師器は当地域で作られますが、須恵器や施釉陶器は他地域で生産されたものが流通していたと考えられます。

「第3章 中世 — 憧れの中国陶磁器と須恵器系・瓷器系陶器」

中世に皿や碗など食器（供膳具）として使用されたやきものは、土師器のような質素なものから、中国陶磁器のような高級なものまでありました。また、「壺・甕・播鉢」といった貯蔵・調理用具としてのや



高松寺経塚群出土白磁四耳壺
(佐藤芳邦氏蔵)

きものの需要の高まりから、列島各地で多くの窯が活発に生産を始めます。14世紀中葉から後半には、列島各地に点在した中世窯業地の大半が淘汰され、瀬戸窯、常滑窯、越前窯、信楽窯、丹波窯、備前窯の「六古窯」と呼ばれる主要な生産地にほぼ限定されます。これらの中世のやきものは、伝統的な技術に加え、中国や朝鮮半島をはじめとする舶来の文物に影響を受けながら各地で独自のスタイルを生み出し、日本的なやきものとして親まれてきました。

花巻でも、経塚や城館遺跡などから中国陶磁器と国産陶器が出土しており、国内外で生産されたやきものが流通していた様子をうかがうことができます。

「第4章 近世

— 国産陶磁器の発展と地方窯の誕生 —

安土桃山時代になると茶の湯が盛んになり、その影響で日本のやきものは使うだけでなく、鑑賞し愛でるものとしての意味も加わって独自の発展を遂げました。

江戸時代初めには、中国からの輸入に頼っていた磁器の生産が有田（現・佐賀県）で始まり、各地へ流通しました。その後、江戸時代後期から幕末にかけては庶民文化の発展に伴い、庶民の生活にも陶磁器が普及しました。この需要に応えるため、陶磁器の自給自足を目的として各地にも窯が開かれ、地域色を持つ陶磁器が生産されるようになりました。

花巻でも早くから盛岡藩の陶器窯が開かれました。また、花巻の湯本・湯口地区は磁器を作るための良質な陶土の産地として知られ、盛岡藩の御用窯に原料を供給していました。

花巻で生まれた鍛冶町焼と花巻焼とともに、南部家ゆかりの茶碗や花巻城跡などから出土した陶磁器を紹介し、味わい豊かな花巻の近世やきもの世界へ誘います。



(左) 鍛冶町焼 白釉掛流大甕
(右) 花巻焼 染付松竹梅文角皿

「第5章 近代

— 窯業技術の近代化と地方窯の展開 —

明治時代に入ると、陶磁器生産は欧米からの最新技術の導入で近代化が加速し、安価で良質な製品を大量に生産できるようになります。岩手県では勸業奨励策による勸業場焼（盛岡市内丸）が開窯し先駆を成します。これを機に、県内各地に新興の窯場が誕生し、一時は20か所を超えました。

花巻では、明治時代以降も地元の良質な陶土を使い、鍛冶町焼が生産を継続していたほかに、県の政

策の流れを受けて新興の窯場が開かれました。明治時代前期頃に金矢焼、明治6年（1873）頃に湯ノ沢焼（小瀬川焼）が開窯し、明治21年（1888）頃まで営まれました。明治28年（1895）には廃窯した湯ノ沢焼の窯場を再利用する形で、杉村勘兵衛によって磁器窯が開かれ、台焼が始まりました。台焼を中心に、花巻で焼かれた近代のやきものを紹介します。



台焼 染付菊草唐文盃洗・盃

「第6章 現代

— 受け継がれる伝統と個人作家のやきもの —

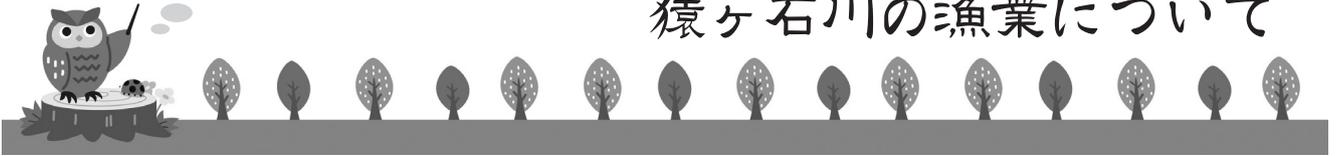
今日までその伝統が受け継がれている台焼、江戸時代の鍛冶町焼を復興し誕生した鍛冶丁焼のみならず、花巻には個人作家によって個性豊かなやきものが作られています。各作家の巧みな技によって創出された魅力あふれる作品をお楽しみください。

(学芸員 高橋静歩)

◆ 関連イベント ◆

- (1) ギャラリートーク
日にち 9月23日（金・祝）、11月3日（木・祝）
時間 13:30～14:00
場所 花巻市博物館 企画展示室
- (2) ミニチュア土器を作ろう！
日時 9月24日（土） 13:30～15:00
場所 講座体験学習
参加費 250円
定員 10人
- (3) 鍛冶丁焼作り
講師 阿部 太成氏（鍛冶丁焼窯元）
日時 10月8日（土） 13:30～15:00
場所 講座体験学習
参加費 1,500円～
定員 15人
- (4) 台焼作り
講師 杉村 峰秀氏（台焼5代目窯元）
日時 10月22日（土） 13:30～15:00
参加費 1,500円～
定員 15人

※(1) 申込は不要ですが入館料が必要です。
※(2)～(4)の場所は講座体験学習です。参加申込は花巻市博物館 ☎0198-32-1030までお願い致します。開催日の1ヵ月前より申込受付を開始します。

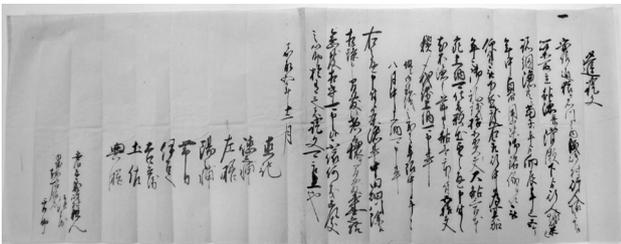
江戸時代における
猿ヶ石川の漁業について

遠野市を源流とし、花巻市東和地域を流れる猿ヶ石川は、古くから淡水魚の宝庫として知られていました。

『邦内郷村誌』の和賀稗貫二郡高木県産物には、「鮎・鮭・鱒・美濃魚（鯉）・ザク砥・紙類・紅花・温石・片栗粉」が挙げられ、その半分が魚類を占めています。また、『南部史要』には「鮎稗貫郡猿ヶ石川名産なり、骨和かにして風味宜し」とも記されています。

しかし、現存する史料が少ないため、猿ヶ石川の漁業に関する研究はほとんどありません。

そこで今回は、「成島毘沙門堂資料」（個人蔵 299 件 856 点）のうち、漁業の許可に関する文書と絵図の 2 点を取り上げ、江戸時代における猿ヶ石川（主に東和地域）の漁業の一端を見てみたいと思います。

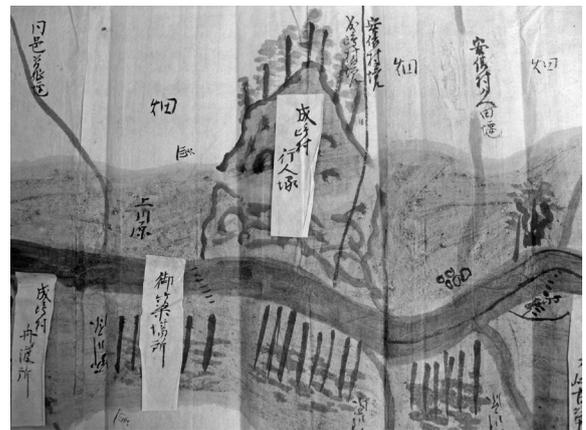


史料①『遺証文（鮎漁許可証文）』嘉永 5 年 12 月

史料①は、盛岡藩が猿ヶ石川で漁業を行う者へ宛てた鮎漁の許可証文の写しです。内容は御礼銭 15 貫文と鮎 300 本を藩へ上納する条件で、築を用いた鮎漁を 5 年間許可するというものです。

史料①と他の史料から、猿ヶ石川で主に用いられていた漁法が「築」であったことが確認できています。築とは川幅全体に簀を並べ立て、遡上する魚を留め、待網で捕獲する仕掛けです。鮎漁は一部投網や釣りもありますが、猿ヶ石川では築で捕まえることを常としていたようです。

史料②は江戸後期に制作された『猿ヶ石川絵図』です。本図には猿ヶ石川全域のうち、東和地域の部分が描かれています。方角として上が北、下が南を示します。また、本図中央には猿ヶ石川が描かれ、築や舟渡などが付箋で示されています。そして、図中央の「成島村行人塚」はやや大きく描かれているため、当塚は本図制作における 1 つの基準になっていたと考えられます。



史料②『猿ヶ石川絵図』江戸後期 28cm×86cm
本図中央の「成島村行人塚」付近を拡大

『東和町史（上巻）』（1974）によると慶長年間から江戸後期、猿ヶ石川全域のうち、東和地域の 8 地点に築が立てられていたとしています。しかし、本図には上記以外の築や古御築跡（築が設置された跡）も見られることから、江戸時代を通して多くの築が設置されていたことがわかります。

今後は、江戸時代の猿ヶ石川において、年間どの程度の鮎や鮭、美濃魚（鯉）などが捕れていたのか、その漁獲量について当館所蔵史料をはじめ『盛岡藩家老席日記雑書』等を用いて明らかにしていきたいと思います。

（市史編さん室 因幡敬宏）

館長
コラム

天王舞

ここ2年ほどユネスコ無形文化遺産にも登録されている早池峰神楽の舞を見ていない。もちろん、コロナの影響であるが、今や知名度が全国区となった神楽は、いざ演じるとなると全国から神楽ファンがやってくる。神楽衆は、それを考慮して自粛しているのだという。寂しいことである。

早池峰神楽には、「天王舞（牛頭天王舞）」という演目がある。日本の民俗芸能研究の礎を築いた本田安次先生の著『山伏神楽・番楽』（齋藤報恩會）には、この天王舞のことを「奇古な舞」と紹介している。たしかに、この舞の主人公である牛頭天王の数奇な運命を考えると奇古な舞ではある。

平安時代頃に忽然と現れた牛頭天王は、もとインドの祇園精舎の守護神といわれ、のちに日本においては薬師如来の垂迹であるとともに、スサノオノミコトと同一視された。牛頭天王が大陸から渡ってきた当初は、疾病

を広める「行疫神」であり、その禍を鎮めるために祀られていたという。やがて、疫病を広めることができる神は、疾病を収めることもできると解釈され、防疫神・厄除けの神として全国各地で祀られた。

ところが、「お天王さん」と呼ばれて長い間庶民に親しまれてきた牛頭天王は、突然、明治政府によってその信仰を禁じられた。その理由については諸説あるが、国家神道を目指す政府が、神仏習合の頂点にいた牛頭天王を排除したとか、「てんのう」と称することを不敬と考えたとも言われている。これにより、牛頭天王社の多くは、八坂神社、八雲神社、津嶋神社などと名を替え、祭神もスサノオノミコトとなって現在に至っている。

早池峰神楽の天王舞も、本来であれば明治政府によって演じることを禁止されても良かったはずであるが、何故かしっかりと今に伝えられている。おそらく、これを舞い続ける原動力となっていたのは、天王舞に疫病退散の願いを託していた庶民たちの強い支えがあったからではないかと思う。

ともあれ、早池峰神楽には、多くの観客の前で天王舞を舞い、コロナを一刻も早く退治して欲しいと願っている。
(館長 中村良幸)

行事予定 令和4年8月～令和4年11月

【企画展示室】

- 特別展「シャガール、ピカソ、ダリからロックウェルまで カラフルでワンドラマな20世紀巨匠の版画達展 Sasa Adair コレクション」
会期：7月16日(土)～8月28日(日)
(会期中無休)
- テーマ展「花巻のやきもの一縄文から現代」
会期：9月17日(土)～11月20日(日)
(会期中無休)

《関連イベント》

- ◇ミニチュア土器を作ろう！
日時：9月23日(金・祝)
- ◇鍛冶丁焼作り
日時：10月8日(土)
- ◇台焼作り
日時：10月22日(土)
- ◇ギャラリートーク
日時：9月23日(金・祝) / 11月3日(木・祝)
※体験講座とギャラリートークの詳細については、P.5の関連イベント情報をご参照ください。
- ◇学芸員講座②「花巻のやきもの一縄文から現代」
※詳細については右欄の講座情報をご参照ください。

【講座】

- ◇学芸員講座②「花巻のやきもの一縄文から現代」
日時：11月19日(土) 13:30～15:00
定員：20名 ※要申込
- ◇館長講座-2「花巻の文化財を歩く
～魅力あふれる花巻の文化財～」
日時：11月15日(土) 13:30～15:00
定員：30名 ※要申込

【ワークショップ】

- ◇勾玉づくり体験
日時：8月6日(土) 13:30～15:00
定員：15名 ※要申込
費用：340円

※講座・ワークショップの会場は花巻市博物館 講座体験学習室です。
※講座・ワークショップともに開催日の1か月前より受付を開始します。
※詳細につきましては、博物館へお問い合わせください。

花巻市博物館

〒025-0014 岩手県花巻市高松 26-8-1
電話：0198-32-1030 FAX: 0198-32-1050
開館時間：午前8時30分から午後4時30分まで
休館日：12月28日から1月1日まで

入館料	小学生・中学生	150(100)円
	高校生・学生	250(200)円
	一般	350(300)円

※()内は20名以上の団体割引料金です。
※割安な近隣4館共通券もあります。
※特別展示を行う場合、別に入館料を定める場合があります。

交通案内

- バス／新花巻駅→賢治記念館口
岩手県交通 土沢線 イトーヨーカドー行…約5分
- 花巻駅→賢治記念館口
岩手県交通 土沢線 土沢駅行…約20分
- 車／花巻空港ICより…約10分
- 徒歩／新花巻駅より…約25分



URL: <https://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/bunka/1008981/index.html>

花◊博 コレクション

Hanahaku collection



材質形状 / 絹本着色, 本紙 / 78.0 × 34.0 cm
制作年 / 文化 10 (1813) 年
落款 / 癸酉秋七月寫 蘭室光龜 印章 / 光龜 (白文印), 金卿 (朱文印)
個人蔵

ほんどうらんしつ
本堂蘭室 (1776-1843) 「松に虎図」

早いもので、今年も夏を迎え、残り4カ月となりましたが、2022年の干支「寅」にちなんだ作品を紹介します。

作者の蘭室は、安永7年、^{たぐさり}田鎖家の四男として生まれ、通称を章蔵、^{しょうぞう さとみ きえもん きう}左登見、儀右衛門、左右と^{こうき}いい、^{ぶんしんどう きんきょう}光龜と名乗り、蘭室、文心堂、金卿と号しました。本堂家の養子となり、享和3年(1803)6月家督を相続します。盛岡藩主南部^{あつせん おそばやく}としだか、利敬の御側役となり、文化3年(1806)から約4年間御絵御用をつとめました。

江戸に上った際、^{わたなべげんたい たにぶんちよう}渡辺玄対や谷文晁から絵を習い、文化13年(1816)2月、藩主の^{あつせん たぐさりかくりつさい}幹旋で兄の田鎖鶴立齋とともに、江戸・日本橋の^{ももかわろう}百川楼で画会を開き、江戸でも名声が高まりました。

眼球を大きく見開き、口角をあげた表情はどことなく微笑んでいるように感じます。さらに、白い髭と松の緑の色彩により、虎の縞模様^{しまちよう}が際立っています。また、大きな手足は丸く描かれ、かわいらしさも窺えます。

慶長19年(1614)、盛岡藩は虎の子を拝領した(『岩手史叢第一巻 内史略』)とありますが、その虎を見て描いたものではなく、師匠や他の絵師が描いた作品、絵手本などから、蘭室独自の表現を加えたものと思われます。

鶴立齋、蘭室兄弟は、盛岡藩の先駆的絵師として名を馳せました。

(学芸員 小原伸博)